

第2分科会 次の世代につなぐ持続可能な社会

会場：横浜市開港記念会館（講堂）

研究テーマ

予測できない未来に向け、持続可能な社会の担い手を育成するために社会教育ができることを考える。

事例発表者

市貝町（栃木県）

市貝ジュニアリーダーズクラブ	会長	永島 誠強	氏
市貝ジュニアリーダーズクラブ	副会長	大山 舞桜	氏
市貝ジュニアリーダーズクラブ	会員	金田 朔太郎	氏

藤沢市（神奈川県）

藤沢市社会教育委員会	議長	西村 雅代	氏
認定NPO法人藤沢市民活動推進機構	理事長	手塚 明美	氏

助言者

青山学院大学	准教授	大木 真徳	氏
--------	-----	-------	---

会場責任者

鎌倉市社会教育委員		下山 浩子	氏
-----------	--	-------	---

司会者

逗子市社会教育委員		角田 進	氏
-----------	--	------	---

記録

神奈川県教育委員会教育局中教育事務所		中西 美保	氏
社会教育主事（兼）指導主事		吉田 起郎	氏

1 市貝町の概要

市貝町は宇都宮市から東側に約 10 数 km、茨城県に近いところにあり、東西 9.9km、南北 15.6km の長方形をしており、2市4町に接している。国指定重要文化財の入野家住宅や古墳、城跡など数々の史跡が残り、全国でも類を見ない武者絵資料館は歴史と文化の町の象徴である。また、北部の芝ざくら公園や那珂の川県立自然公園、中部の伊許山、南部の多田羅沼、点在するため池、小貝川の清流など美しい自然にも恵まれている。絶滅危惧種となっているサシバという渡り鳥が、春から夏にかけて飛来することから、道の駅「サシバの里いちかい」がある。さらに、芝ざくらまつり、キャンプ場、ゴルフ場など、祭りも遊びも楽しめる町である。

人口については、平成7年以降減少傾向が続き、令和7年には1万人を割る見込みである。特に年少人口に関しては平成27年の1,437人に対し、令和7年には1,135人と顕著な減少傾向となっている。

2 おかのぼROCK Fest. の実施

市貝ジュニアリーダーズクラブ（JLC）は、市貝町在住の高校生によって構成される団体で、ボランティアや地域づくり活動を行っている。設立から40年以上の歴史があり、町の行事補助やイベント企画、ごみ拾い活動などを行い、地域への愛着を育む場となっている。近年では卒業後も活動を継続するユースリーダー制度が創設され、活動の幅も広がってきている。

令和5年、従来 of 行事補助中心の活動を見直し、高校生の主体性を活かして、新たな挑戦として、市貝町で「音楽フェス」を開催することを決定した。県の補助金の活用が確認できたこともあり、地域で活躍する大人やJLCのOB・OGらとともに実行委員会を立ち上げ、企画案のブラッシュアップや運営支援を受けながら準備を進めた。

音楽フェス「おかのぼRock Fest.」という名称は、会場が城見ヶ丘にあることから、「丘をのぼったら音楽が鳴っていた」というイメージから考えられた。「町の知名度アップと地域の活性化」、「若者が町に愛着心をもつ」、「若者が輝ける場をつくる」ことを目的に、19歳以下の学生バンドの演奏、ゲストアーティストの演奏、県内飲食店の出店、町の特産品を景品としたプレゼント抽選会などを行うこととした。

3 おかのぼROCK Fest. 開催までの活動内容

音楽フェス「おかのぼRock Fest.」を企画・開催するにあたり、準備段階として、まず近隣での類似イベントの視察を行い、学んだ内容を基に「城見ヶ丘」の地名を含むフェス名をデザインした。音楽フェス実行委員会の事務局は町の生涯学習課が担当し、各種契約業務の締結や補助金の活用、企画の具体化などを進めた。ポスターのデザインを県内高校生から募集して作成し各高校や駅に掲示、その他、インスタグラム・新聞・ラジオ等を通じた情報発信を行い、幅広い世代に周知した。

フェス当日は雨の中での開催となったが、県内外から多くの参加者が訪れ、若い観

客だけでなく年配の方の参加もあった。出演者や来場者からは、「楽しかった」、「感動した」、「これからも続けてほしい」という声が多く聞かれ、とても好評で、準備をしてきた高校生たちにとって、地域活性化の実感が得られ、達成感と嬉しさを味わうことができるイベントとなった。今回のイベントの企画を主体的に進める中で、高校生たちは意見を積極的に言えるようになり、自主性や責任感が育まれるなどの多くの成長を感じられた。今後もアンケートで寄せられた改善点を参考に、より良いイベントを目指して取組を続けていく予定である。

4 高校生が思う市貝町のこれから

市貝町は若者が楽しめる場や特長的な資源が少なく、地域の知名度も低いため、「田舎だから」という意識が地域の可能性を狭めている。しかし、今回、高校生が主体となって開催した「おかのぼ ROCK Fest.」は、地域の可能性を示し、町への愛着を若者に芽生えさせるきっかけとなった。JLCの活動は、若者と地域を結びつける支えとなっている。来年もさらに雨にも負けないようなイベントを開催し、希薄になりつつある町民同士の交流やつながりを多く持てるようにしていきたい。そして、今後も若者が地域に愛着と誇りを持ち、夢を語り、チャレンジし続けることができる持続可能な地域社会を目指していきたい。



<質疑応答>

【質問】 高校によっては、ボランティア活動を単位認定することが制度上認められているが、今回のボランティア活動は単位認定されているのか。

【回答】 学校でボランティア単位が認定される仕組みはあるが、条件があり、取得できる機会が限定的である。条件として、年に4回程度実施される必修の講義の受講や、指定されたボランティア活動への参加などがある。これまで毎週、JLCの活動や定例会、町の活動などに参加しているため、学校のその条件にはうまく合わず、今回の活動も単位認定は受けていない。

【質問】 JLCの活動が40年間続けられてきたことは、今回の分科会のテーマ「次の世代につながる持続可能な社会」ということから素晴らしいことだと思うが、このように続けることができたのは何が要因か。JLCのどのような点が良かったのか。

【回答】 実際に過去に何をやっていたか、わからないこともあるが、これまでごみ拾いや町のサポートなど、細々と無理をせずにゆっくりと活動してきたから続いたのではないかと思う。

【質問】 本日の話の中で契約などが難しいという話があったが、18歳が成年年齢となったことは、活動の幅を広げるようなことに寄与したか。

【回答】 自分は18歳ではないため、契約に関してはよくわからないが、今回は町の事務局や委託業者が契約の対応をしており、高校生が個人で契約をすることはなかったため、18歳が成年年齢になったことは特に影響していないと思う。

1 藤沢市のあらし

藤沢市は、東京から約 50km に位置し、相模湾に面し、気候温暖な自然環境に恵まれ、横浜市をはじめ 6 市 1 町に囲まれる、人口 44 万人を超える都市である。ショッピングモールなどを有する商工業都市、特産品をもつ農水産業都市、江の島など多くの観光客が訪れる観光都市、5つの大学を有する学園都市として発展している。

2 藤沢市社会教育委員会について

藤沢市社会教育委員会会議は、社会教育に関する計画の立案と進捗管理、社会教育に関する提言などが職務とされ、15 名で構成されている。学校・社会教育関係者、学識経験者のほか、文化、スポーツ、人材育成等の市民活動団体の代表や民間企業など、様々な分野で活躍する委員が参画している。そのため、会議の中では、行政が行う施策だけでなく、地域の中で様々な主体が実践する社会教育活動についても情報共有できる体制になっている。

3 社会教育委員会と「生涯学習ふじさわプラン 2026」について

藤沢市社会教育委員会会議では、市の生涯学習施策を総合的に体系化して推進するための計画「生涯学習ふじさわプラン 2026」の策定に当たっての提言と、社会教育委員のもつ市民視点と専門的な視点を反映した施策の審議、外部評価及び意見提案等を行っている。プランの策定から推進まで、社会教育委員会が重要な役割を担っている。

「生涯学習ふじさわプラン 2026」では、基本理念「多様な学びと学びあいから 地域の人がつながり 藤沢の未来を創造する」の実現のため、①「学びたい思い」を支援する②「学べる機会」を提供する③「学びあい」を創出する④「学んだ成果」を生かしつなげる、という 4 つの基本目標を掲げている。これに基づき、誰もがいつでも生涯学習に取り組むことができる仕組みづくりを目指している。

4 「ワカモノ×NPO インターンシッププログラム」

認定 NPO 法人藤沢市民活動推進機構による「ワカモノ×NPO インターンシッププログラム」は、2014 年から実施されている取組で、NPO との連携と未来を担う人材の育成の実現に向けて、高校生から大学院生までの若者（ワカモノ）が地域の NPO 団体で約半年間、インターン生として活動する。プログラムは、若者が自ら考え、学び、選ぶことができる力を養い、地域の担い手として成長すること、NPO や市民活動団体の組織基盤強化、他地域への展開を目的としている。参加者は学生の自由意思による応募で、学年や人数は毎年異なる。プログラムは事務局がコーディネイト役を務め、OB・OG のサポートメンバーも協力して運営している。参加者はオリエンテーションを通じて活動の心得を学び、まちづくり、文化、子ども、福祉、国際、環境などテーマの違う団体で活動を行い、地域の実践者と協働しながら、地域社会の活性化に寄与している。また、他の参加者と交流する月例会を開催し、学びの共有を図りながら経験を積んでい

る。インターン活動の締めくくりに、活動の集大成として参加者自らが企画・運営する「成果発表会」を開催している。これらの取組を通じて、責任感の芽生えや達成感を得る機会となっている。さらに、修了者が運営側のサポーターとして次年度以降の活動を支援する循環も生まれている。

プログラムの修了者からは、「様々な大人と出会って視野が広がった」、「現場での経験が今に活かしている」等のコメントがあった。また、プログラム修了後、在籍している大学で活動団体「観光まちづくり学生企画会|メヘヘ」を立ち上げ、プログラム参加者同期によるつながりを生かして、ワークショップを行うなど多様な活動へ広がった。プログラムで得られた経験や学び、人とのつながりが、現在の活動の原動力となっているという報告があった。

プログラム参加者が所属する高校・大学の先生方からは、「地域との出会いが成長につながる」、「他のインターンシップとは得られる経験が違う」等の肯定的な評価を多くいただいている。

プログラム修了者は社会人となり、それぞれの場でプログラムの経験を活かして活躍している。藤沢市民活動推進機構は今後も、地域連携を強化しながら担い手育成を進め、次世代のまちづくりを支える取組を広げていきたいと考えている。

5 おわりに～藤沢市の社会教育の推進～

藤沢市では、地域活動を支える人材の高齢化や、新たな担い手の育成が課題となっているが、「ワカモノ×NPO インターンシッププログラム」は、参加者が修了後に運営側となり事業を継続する仕組みを備え、学びの循環を通じて「未来を担う人材育成」を実現している。このような、行政だけでは手の届きにくいような地域で実践されている社会教育活動についても、その成果や課題を行政施策や様々な主体の活動にフィードバックすることで、藤沢市の社会教育の推進につながっていると考えられる。

現行の「生涯学習ふじさわプラン 2026」は来年度が最終年となるが、社会教育委員会議では、市民と行政をつなぐ役割を担いながら、次の世代につなぐ持続可能な社会を構築する藤沢らしい次期プランの策定へと向かっていきたい。



<質疑応答>

【質問】 この活動は一般行政と教育委員会の接点に関わっていると思うが、教育委員会事務局と一般行政のまちづくりに関する部署との連携について、藤沢市ではかなり密に行われているのか。

【回答】 藤沢市の社会教育委員は教育委員会に委嘱されているが、事務局は首長部局の生涯学習総務課で担当している。当初は、社会教育が首長部局で行われることに懸念を感じ、事務作業だけで終わってしまうのではないかという不安もあった。しかし、任命権者である教育長の理解と行政職員の働き等により、社会教育というところを大切にしながら、円滑に進められていると感じている。

グループ協議及び質疑応答

<市貝町への質問>

【質問】 市貝町のジュニアリーダーズクラブの積極的な活動の発表はとても素晴らしかった。学生が中心となり、契約等の場面で大人たちと協議していくということだったが、今回の事例では社会教育委員との関わりは特になかったのか。行政の方にお聞きしたい。

【回答】 今回の音楽フェスでは、社会教育委員として直接関わることはなかったが、元社会教育委員長など社会教育委員の経験者が実行委員会に参加し協力した。社会教育委員との密接な関係は、今回はあまりなく残念だったが、経験者としての支援があった。

他にも町の青少年健全育成推進委員や教育委員等、若い人の活動に理解がある方々に関わっていただいた。

【質問】 市貝町のフェスは今後も続けていきたいということだが、単発イベント的なフェスと、今までのごみ拾いなどの細々としたボランティア活動とのバランスについてどう考えるか。

また、若者は部活動や塾等で忙しい中、ボランティアをする利点は何かあるのか。JLCの活動に継続して参加するにあたり、モチベーションを保つ工夫やきっかけとなったことはあったか。

【回答】 今回のフェスはJLC全員で取り組んだが、今後は分業しボランティアやイベント企画を希望する人が選んで参加できる形にする。既存の活動も続けながら、幅広く参加ができるようにしていきたい。

ボランティアは、利点があるから行って

いるのではなく、参加した結果、得られるものがあつた。自分がいいと思うことをやるのがボランティアで、活動前から利益を考えてやるものではないと思う。JLCの活動は、社会貢献のためというよりも部活動のように捉えて自然に取り組んでいた。学校の部活動に入っているにも、JLCの活動は参加する日程を選べるため、両立できるように調整する点も自身の学びにつながった。また、学校や部活以外で他市町の高校生と交流できることが新たな刺激となり、大きな魅力だと感じた。

<藤沢市への質問>

【質問】 藤沢市の社会教育委員会議はどの範囲で企画を立案しているか。また、NPOと協賛・協働の形にするためにはどうしたらよいか。さらに、社会教育委員は任期によって人が変わると、同じ熱量で事業を進めるのは難しいと思うが、その対応策があれば教えてほしい。

【回答】 社会教育委員会議は事業を直接企画・立案することではなく、「生涯学習ふじさわプラン2026」に基づき社会教育全体を推進する役割を担っている。藤沢市では、NPO支援関係者が社会教育委員として長年参加しており、市民活動団体(NPO)が実施している事業の情報を共有することで、社会教育の推進に役立っている。行政は予算を持つ一方で様々な制約もあることから、行政と市民活動団体(NPO)が連携し、社会教育事業として計画に組み込み、展開している事例も多い。発表事業は、市民活動団体(NPO)が主体となり、行政の課題を補完しながら進める形となっている。

今回の分科会テーマ「次の世代につなぐ持続可能な社会」は非常に大きなテーマであり、どう検討すればよいか難しくもある。

「持続可能」という言葉は、おそらく「持続可能な開発」から始まるもので、環境等を考慮しない開発が破綻を招くという考えがもとにあるのだろう。一方で「持続可能な社会」という場合、以前は当たり前であった社会の持続ということが、現在は人口減少などの課題を背景に、その前提が崩れている状況にあることを示しているように思われる。社会教育が地域社会の維持・発展に必要な不可欠であることを意識しながら、次の2点について述べたい。

1 若者の支援について

市貝町と藤沢市の発表において、若者の自主性や主体性を引き出すことの重要性が強調された。社会教育では、学習者の自主性や主体性を尊重することが基本原理とされており、教育全般においても学ぶ人自身の意思が不可欠である。特に社会教育では学校教育と比べて、さらにその点が重要になってくる。しかし、現在では若者の自主性が自然に発揮されることの難しさが、たびたび指摘される。そのようななかで、それを支える大人の存在が鍵を握るように思われる。市貝町では自治体職員が若者の活動を後押しし、藤沢市ではNPOを運営している大人が若者の自主的・主体的な活動を支えている。このようにバックアップする環境が、若者の成長につながっている。今回の分科会自体も、大人たちが協議を重ね、運営をしている。そのように支援してくれる大人がいるということを、若者が気づく機会も大切で意味のあることだと考える。

2 地域の社会教育での蓄積について

市貝ジュニアリーダースクラブは40年以上続く活動であり、その歴史ある組織が若者の活動の舞台となっている。藤沢市のプログラムも、地域に根付いたNPOが受け皿となって若者を受け入れる形で成り立っている。これまでの地域の活動や社会教育の領域での蓄積に改めて目を向け、新たな若者たちの活動を生み出す土台であることを再認識する必要がある。地域の伝統的な団体や仕組みの価値を重く受け止めつつ、その舞台を生かして若者の活躍を支える視点が重要である。

また、首長部局と教育行政の連携の必要性も議論された。地域課題の解決には教育だけでは捉えられないことがあり、両者の連携は不可欠である。社会教育の蓄積を首長部局の施策に活かす取組を進めていけるとよい。社会教育の研究大会がこうした議論の場となり、教育行政のあり方や地域の課題への対応が議論されることは非常に意義深いことである。

最後に、発表者やフロアの参加者の方々の積極的な発言による協議は非常に有意義だった。この分科会で得られた学びを持ち帰り、さらに議論を深めつつ地域の課題解決に活かしていくことを期待している。

